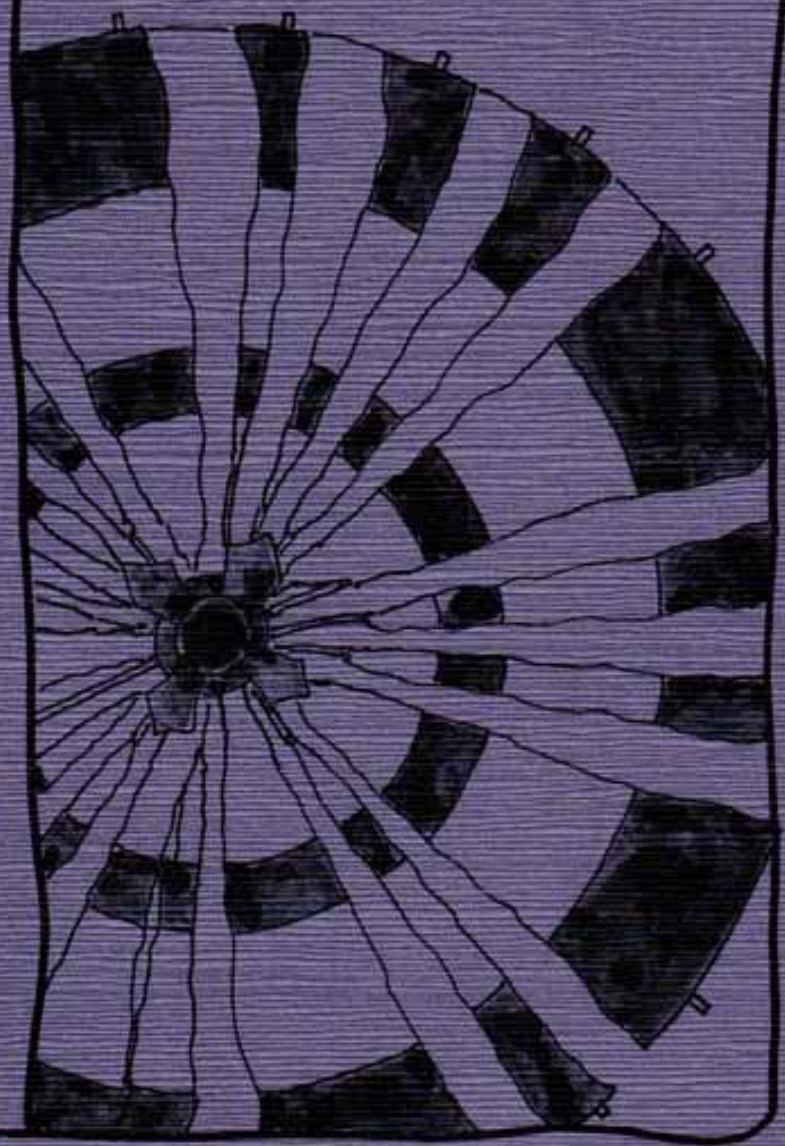


やぶれ傘



二二六号
二〇二三年六月

ここよりは砂地にかはる夾竹桃 根橋宏次

工場の脇を日傘の人がくる 大島英昭

混み合つてゐる保育園前口永 止久保 勲

玄関を出てすぐにあるからす麦 きくちきみえ

かるの子のときに羽ばたく仕草して 廣瀬雅男

カルテラタン遠しと思ふ五月来る 藤井美晴

切れ目なき雲は明るし花卯木 渡邊孝彦

ひさびさの晴からし菜の花の土手 青谷小枝

露味憎は女将の手製研で酒 瀬島酒望

降りさうな空晴れてくる夏の夕 小山よる

夏兆すうつすら残る種痘跡 有賀昌子

吸盤を見せさかしまに守宮かな 安藤久美子

小上がりに夕日差しくる洗ひ鯉 秋山信行

きのふより雨がちとなる花卯木 白石正躬

麦の秋道の先には道の駅 天野美登里

抄 集 句 傘 ぶ れ や

大 崎 紀 夫 選

春の空棒高跳びのバー越しに 木村瑞枝

製茶場の窓に茶埃日が落ちて 倉澤節子

朧夜の手帖に読めぬ走り書き 小泉里香

雨あがり真下から見ると八重桜 小巻若菜

測量の棒持つあたり花吹雪 柴崎和男

春雷のひとつが置いてゆく静寂 高橋 均

三里塚山も機影もかすみをり 竹内文夫

野漆や橋は車の数珠つなぎ 萩原溪人

四十雀の声の近くのベンチに居 萩原久代

春日傘花びら付けて傘めけり 本郷美代子

犬だけに興味もつ犬樟若葉 道林はる子

献眼をして逝きし妻五月雨 箕田健生

若葉風第三ボタンまで開けて 武藤節子

山沿ひを高く飛びつつ鳥帰る 石原健二

だつこ紐で移り来し子よ入学す 岩藤礼子

耳 菜 草

大崎紀夫

杉菜など眺めてパンを食ふお昼
ひろびろと石蓐を干してゐる川原
割り箸でちりめんじやこを大づかみ
雪形を見にゆく土曜日は晴れて
雨あとの日が差し蝶がまつ黄色

塚山のでつぺんだけが草刈られ
土手に着くまで道ばたの耳菜草
昼からは晴れてとうすみとんぼ飛ぶ
ひと枝に鳩が何羽か 日雷
青りんごかりりかりりとうしろ席
漁船より二人おりくる日の盛り
草を刈る近くに山羊が立つてゐる

夾竹桃

根橋宏次

春昼の草砥のにほふ理髪店
 金盞花かへりは左側に海
 草に来てへたへた座る春の鴨
 すかんぽへ舟洗ひたる水流れ
 跳ぶために二三歩退る蛇苺
 雲来れば雲の影くる麦の秋
 切り離すうしろ三輛麦の秋
 かたまつて草流れくる夕薄暑
 筍をゴツんと置いてゆきにけり
 ここよりは砂地にかはる夾竹桃

日傘

大島英昭

後ろ向き前向き春の駐車場
 ふらここにサッカーボール転がり来
 ゑんどうの白花きのふから小雨
 はつ夏の駅のポストに投函す
 校門を人の出てくる麦の秋
 夏帽が自転車で来てつと止まる
 代掻きにのそりと来たるトラクター
 転がつてゐるポリばけつ花あやめ
 足早に蟻は日の斑をひとつ越え
 工場の脇を日傘の人がくる

日 永

丑久保勲

劍山に白梅を差し朝の卓
綿棒で耳かきをする目借時
猫柳弁財天へ架かる橋
声上げてくだる自転車花曇
枯山水の石へさざ波花馬酔木
夏近し二分進めてある時計
ゴムの木を居間から庭へ夏近し
プロペラ機の物憂げな音犬ふぐり
混み合つてゐる保育園前日永
柵を置く塔頭の門若楓

からす麦

きくちきみえ

花どきにまさかの戦してゐたり
すぐそこに釣れさうにゐる春の鮎
春昼の砂利山登るシヨベルカー
三分の電車の遅れ初つばめ
包丁の刃裏刃表初がつを
筍のあるといふ場所いけばある
盛り皿の冷されていて初がつを
一口のあとの一息新茶飲む
国道を渡る電線夏つばめ
玄関を出てすぐにあるからす麦

かるの子

廣瀬雅男

椀の芽の上にまさをな空がある
すみれ咲く土手をくの字に登る道
バスを待つベンチに辛夷散りきたる
春暁の空へ両の手延ばしけり
朧夜の高層ビルは皆灯す
ぶらぶらとひとり来て見る桜かな
あれも捨てこれも捨てたり衣更
花は葉に子は鉄棒にさかあがり
新茶汲む同じ話を二度三度
かるの子のときに羽ばたく仕草して

五月来る

藤井美晴

自動ドアを開けばもわと温い風
登りきてがれ場にゲンノシヨウコ白
戦争の報のひねもす柘榴咲く
夏霞高圧線は県境へ
ひと刷けの雲うすれゆく椎若葉
タワークレーン動かず夏の昼の月
鉄パイプ担ぎ上げをり夏の雨
雨過ぎてより遠雷を一つ聞く
労働歌聞こえずバラの花咲いて
カルチエラタン遠しと思ふ五月来る

枝蛙

渡邊孝彦

うぐひすや親子で握り頬張つて
電柱の先でさへづり合つてゐる
ガス工事中の三叉路春の月
公園に大勢がゐる桜かな
溝川の水ちよろちよると濃山吹
つつじ垣沿ひに自転車押して行き
山畑の傍ら桐が咲いてゐて
出つ会す大輪の薔薇真つ赤なり
切れ目なき雲は明るし花卯木
竹筒を水流れくる枝蛙

からし菜

青谷小枝

ひさびさの晴からし菜の花の土手
川越えてまた風の来る蝶の昼
芽木の風信濃きらきらきらす
小あがりに花の下来し靴ぬいで
クローバの野に走りたき子を放つ
木の股に子が二三人桑いちご
ぐみの花もうすぐ雨になるらしく
燕飛び交ひ大聖寺川小雨
セスナ機の傾いで横切る鳥ぐもり
地球に戦火地球儀に春埃

落味噺

瀬島洒望

辛夷咲く道は秩父にほど近く
工場の中に自販機あたたか
仁王様修復で留守あたたかし
大銀杏芽吹く鏝阿寺濠に鯉
桜咲く豊島区巢鴨小学校
八十八夜昼餉に寿司の出前取る
鳶の声して富士塚にオオデマリ
仮設トイレ運ぶトラック八重桜
落味噺は女将の手製枰で酒
空噴かしするオートバイ青葉風

夏帽子

小山よる

春雨のカフェで履歴書書いてをり
大犬に小犬が吠える春の昼
紅つつじ随分古い家であり
髪色を明るく染めて初夏の街
夏帽子双子ではなく三つ子なり
南風吹く墓地駆け回る寺の犬
青鷺の写真を撮つてゐる少女
駅前のおぢさゝみ取つて付けたやう
日に焼けしヨガの講師の細き腹
降りさうな空晴れてくる夏の夕

夏兆す

有賀昌子

注射針に血管逃げる四月馬鹿
 裏手には蜂の巣のある宝物庫
 微笑めば笑窪の少女花蘇芳
 夜食には桃の缶詰三鬼の忌
 春暁の壁に凭れてスキ―板
 花曇り老眼鏡を拭きなほす
 散るさくら文珠寺の絵馬かたかたと
 古寺の石碑の傾ぎすみれ草
 全身で笑ふ少女に桜散る
 夏兆すうつすら残る種痘跡

ここよりは砂地にかはる夾竹桃 根橋宏次
 工場の脇を日傘の人がくる 大島英昭
 混み合つてゐる保育園前日水 止久保 勲
 玄関を出てすぐにあるからす麦 きくちきみえ
 かるの子のときに羽ばたく仕草して 廣瀬雅男
 カルチエラタン遠しと思ふ五月来る 藤井美晴
 切れ目なき雲は明るし花卯木 渡邊孝彦
 ひさびさの晴からし菜の花の土手 青谷小枝
 路味噌は女将の手製拵で酒 瀬島酒望
 降りさうな空晴れてくる夏の夕 小山よる
 夏兆すうつすら残る種痘跡 有賀昌子
 吸盤を見せさかしまに守宮かな 安藤久美子
 小上がりに夕日差しくる洗ひ鯉 秋山信行
 きふより雨がちとなる花卯木 白石正躬
 麦の秋道の先には道の駅 天野美登里

抄 集 句 傘 紀 大 崎 夫 選

春の空棒高跳びのバー越しに 木村瑞枝
 製茶場の窓に茶埃目が落ちて 倉澤節子
 朧夜の手帖に読めぬ走り書き 小泉里香
 雨あがり真下から見る八重桜 小巻若菜
 測量の棒持つあたり花吹雪 柴崎和男
 春雷のひとつが置いてゆく静寂 高橋 均
 三里塚山も機影もかすみをり 竹内文夫
 野漆や橋は車の数珠つなぎ 萩原溪人
 四十雀の声の近くのベンチに居 萩原久代
 春日傘花びら付けて窄めけり 本郷美代子
 犬だけに興味もつ犬樟若葉 道林はる子
 猷眼をして逝きし妻五月雨 箕田健生
 若葉風第三ボタンまで開けて 武藤節子
 山沿ひを高く飛びつつ鳥帰る 石原健二
 だつこ紐で移り来し子よ入学す 岩藤礼子